

仮性包茎手術を正当化する言説の 1970-90 年代における変容

——「医療化された男らしさ」概念を手がかりとして——

東京経済大学 澁谷知美

1 目的

この報告の目的は、「1970年代から1990年代にかけて、仮性包茎手術を正当化する青年向けの言説はどのように変容したか」という問いを、「医療化された男らしさ」概念(Rosenfield and Faircloth, 2006)を手がかりに明らかにすることである。ほんらい手術は不要とされる仮性包茎だが、「治療」のために手術を受ける男性は少なくないとされる。そこで、どのようなレトリックが手術の正当化に動員されているのかを調査する。そのさい、時代による言説の変化にも注目したく、如上の問いを設定した。この問いを明らかにするため、次の作業仮説の当否を検討する。「時代が下るにつれ、仮性包茎手術を正当化する言説のバリエーションが増える。そのバリエーションの中には、〈女性の意見〉の体裁をとるものが存在する」。なお、本報告は澁谷(2017)の続きである。

2 方法

1970年代から1990年代に刊行された『プレイボーイ』、『ホットドッグ・プレス』などの青年向け雑誌から、包茎についての記事をピックアップした。収集された100件あまりの記事のうち、仮性包茎手術を読者にすすめる言説に注目し、どのようなレトリックが用いられているかを分析した。包茎言説全体における手術正当化言説の位置取りを確認するため、手術をすすめない言説にも着目した。

3 結果

作業仮説については、肯定的な結果が得られた。1970年代は、仮性包茎を放置していると、早漏になりやすい、女性に快樂を与えられない、病気にかかりやすい、短小に見える、積極的になれないといったデメリットが「地の文」で列挙される傾向にあった。しかし、1980年代後半から、「地の文」に加えて〈女性〉がデメリットを語るようになる。すなわち、「くさそう」、「彼氏が包茎だったら手術させる」などの、包茎を否定し手術を促す言説が〈女性の意見〉として紹介されるようになる(なお、実在する女性が本当に語っているのかという問いはここでは留保している。それは問わず、女性が語っている体裁をとっているという意味で「女性の意見」や「女性」を〈 〉で括っている)。一方、1980年代半ば以降、「かえって新たな悩みの種を生む」などの、手術に否定的な言説も散見された。また、〈女性の意見〉として手術は不要とする言説もあった。ただし、その数は、手術正当化言説に比べ圧倒的に少ない。

4 結論

上記の結果から、当初の問い「1970年代から1990年代にかけて、仮性包茎手術を正当化する青年向けの言説はどのように変容したか」にたいし、「語り手に〈女性〉が加わった」という答えが得られた。手術の目的は「男らしさ」に彩られている。そして、手術正当化言説の生産者はほとんどが男性である。「男らしさ」を男性が男性に伝達するさい、〈女性〉の形象を採用する事実が上記の調査から確認された。ここから得られる理論的示唆は、「男性による男性への「男らしさ」の伝達プロセスにおいて〈女性〉の擬態が採用される」ということである。

文献

澁谷知美, 2017, 「戦前期日本の医学界で仮性包茎カテゴリーは使われていたか——1890-1940年代の実態調査の言説分析」『人文自然科学論集』(140): 59-78.

Rosenfield, Dana and Christopher Faircloth eds., 2006, *Medicalized Masculinities*, Philadelphia: Temple University Press.